

# 楽々亭通信

発行:NPO法人没イチの会・京都



## 十二月の楽々亭を 開催いたしました

謹賀新年

本年もよろしくお願  
い申し上げます

本願寺派布教使

安堂芳雅

令和六年はお浄土の鳥  
からはじめようと思いま  
す。

ご法事などでよく読ま  
れるお経といえ、『仏説  
阿弥陀経』です。

この中に、一日に六回美  
しい声で鳴き、仏さまの教  
えを説く極楽浄土の鳥が  
六種類でてきます。

まずトップバッターは  
びやうこう  
へ白鶴。これは鶴のよう  
に白い水鳥です。

二番手はへ孔雀、三番手



はへ鸚鵡と続きます。(漢  
字変換でへ鸚鵡と出てき  
たときはびっくりしまし  
た、なんと四十七画もあり  
ます。)そしてへ舍利、こ  
れは九官鳥です。

白鶴、孔雀、鸚鵡、舍利  
の四つは、鳥類図鑑で見  
る事ができますが、あとの二  
つ、へ迦陵頻伽とへ共命  
鳥は、お浄土だけに住ま  
う鳥で、図鑑には載ってい  
ません。

そこで、仏画で調べたの  
ですが、地球上にはいない  
はずです。へ迦陵頻伽は、  
上半身は楽器を持った女  
性で下半身は鳥でした。そ  
の奇妙な姿に見入ってい  
ると隣のへ共命鳥に目が

いきました。なんと……、  
こちらは体が一つで頭が  
二つあるではありません  
か。

### ■一体二頭の共命鳥

一つの体に二つの  
頭……、なぜこのよう  
な姿の鳥が極楽浄土に  
いるのでしょうか。

これはまだ、共命鳥  
が極楽浄土に生まれ変  
わる前、ヒマラヤの雪  
山辺りに棲んでいた時  
のお話です。

多くの共命鳥の中で、  
とりわけ素晴らしい一羽  
がいました。

しかし、二つの頭のど  
ちらもが、「私の頭の羽毛  
はとびきり美しく、私の  
さえずり声はどんな鳥よ  
りすばらしい」と言い出  
しました。

そして、「私が、私が」  
と双方ともが主張し、お  
互いに憎みあい争うよう

になってしまったのです。

ついには「世界で一番の  
鳥は私に間違いない、あい  
つさえいなければ」と考え  
るようになりました。

そしてとうとうある日、  
一方の頭が「毒の実」を片  
方に食べさせてしまった  
のです。

食べた頭の方はあつと  
いう間に死んでしまいま  
した。が、しばらくすると  
食べさせた方も苦しみは  
じめました。

もうおわかりですね。そ  
うです、頭が二つでも、体  
は一つなのです。

その時です。  
一部始終を極楽浄土  
から、じっと見ておら  
れた仏さまが、降りて  
来られました。

そして、  
「共命鳥よ。お前はま  
もなく死ぬであろう。  
最後に言っておきたい

ことはあるか？」とた  
ずねられました。

「仏さま、私は愚かも  
のでした。

いつも“私より自分  
の方が美しく素晴らし  
い”というあいつが、憎  
くて仕方ありませんで  
した。ずっと“死んで  
しまえ”と思っていた  
のです。

しかし今、わかりま  
した。あの隣の頭が一  
緒にいてくれたからこ  
そ、自分が生きてこら  
れたのです。」

「そうか、よく気が  
ついてくれた。他を害  
するものは、自分も害  
することになるのだ。」  
と、仏さまは言われま  
した。

「そうでした……は  
い、そうだったのです」  
「わかったのなら、お  
前を極楽浄土へと連れ  
て行ってやろう。」

極楽浄土で、仲良く暮らすことの大切さを、皆に説き伝えなさい。」

仏さまはその共命鳥をそつと両手でつつまれ、極楽浄土へお連れになられました。

以来、極楽浄土の共命鳥は、「**他を滅ぼす道は己を滅ぼす道、他を生かす道こそ己の生かされる道**」と鳴き続けているからです。

■支え合うことの大切さ  
人一倍、我が強い私は、つい、私とあの人、私とこの人と区別し、そこに勝ち負け、優劣を見つけて、優越感や劣等感に振り回されています。この共命鳥の物語はそんな私に、独立して存在しているいのちの一つもないことを教えてくれました。

ある僧侶の方が、「すべてのいのちには別々の身体を持ち、違う考えや思いを持っていて互いに依り合い見えるけれど、互いに依り合い関係しあって存在しているのです。ですから、独立して存在するいのちの一つもありません。」と

書いておられました。

私とあなた、あなたと私、一見バラバラに見えるいのちも、深いところでは一つにつながっているのです。

「**他を滅ぼす道は己を滅ぼす道、他を生かす道こそ己の生かされる道**」

お互いに共命鳥の説法に耳を傾ける一年にしたいですね。



人生は一度だけはほんとうそ？

よく耳にするのは、人生は一度だけだから悔いのない人生を送りましょう！という言葉です。私はこれ、ほんとうそ？と

思ってしまう。

十一月の楽々亭でこのお題で話し合いました。仏教ではお釈迦様が六道輪廻を繰り返す、と教えておられます。六道とは天上、人間、地獄、修羅、畜生、餓鬼の6つの世界に生まれ変わっていくということ。人生一度切りでしたら、生前もないし、死んだら何も残らない全て終わりという世界ですね。六道輪廻を繰り返す場合は私が死んだら人間の肉体はなくなりませんが、心は犬に生き返るかも、又虫に、樹木に、すべての肉体のあるものに生き返る事が考えられます。ゴキブリに生き返って誰かのお宅でスリッパでぱたんと叩かれ又死んでしまうのでしょうか、次は何に生き返るのか？

6人の方の意見は半分は死んだら何もない終わりという意見と半分の方は命が何処かに行くという意見でした。さてどうなんでしょうか、死んでみなければわかりませんね。

安堂先生は、命は繋がっていくのではというご意見でした。伴侶をなくされて1ヶ月しか

経たない方が見えませんでした。毎日泣いてばかりの日々とおっしゃっていました。その方にとつてご主人はその方の胸の中で生き続けているのでしょうかね。みんなでその方のため明るく話をできるように導いていて、その方も少しお話をされました。早く元気になられることをお祈りしています。

さて、死んだら全て終わりで行くのでしょうか？それともどこかに行くのでしょうか？  
私は悟りを開かれたお釈迦様の言葉を信じて、生きていこうと思つています。

籠谷 弘

### 楽々亭 1月の予定

1月12日 (金)

境谷会館 (場所変更)

午後1時30分～3時30分

### 楽々亭通信

発行元：NPO法人 没イチの会・京都

住所：京都市西京区大枝北沓掛町一丁目5番地2-406

TEL：075-874-5320 FAX：075-874-5328

MAIL：kago@botuichi.com

●楽々亭通信では、皆様の投稿を募集しております。身の回りの出来事や体験談など、何でも結構です。楽しかったこと、つらい想いをしたことなど、様々な胸の内を皆様と共有して行きたいと考えております。